

2 愛媛県に生息・生育する（侵入のおそれのある）特に注意が必要な外来生物

種名：アライグマ

(区分) 特定外来生物

移入した経緯：ペット・展示目的で飼育された個体の逃走と飼えなくなった個体放棄

分類： 哺乳類

科名： アライグマ

学名： Procyon lotor (プロキユオン・ロトル)

原産地： カナダ南部・北米・中央アメリカ

県内での分布状況

四国中央市で大小2頭を目撃
東温市で調査用カメラにて生息を確認



東温市で定点カメラに写ったアライグマ
(平成21年8月31日)

撮影:(財)日本自然保護協会:愛媛自然環境調査会

種の特徴	頭胴長41～60cm、尾長20～41cm、体重4～10数kgでタヌキよりも大型。体色は灰色から茶褐色、白地に黒いアイマスクをつけたような顔とリング状に縞模様が入った尾が特徴。
被害状況	県内ではまだ被害報告はないが、県外の定着地では、農作物被害及び小動物の食害による生態系への影響が懸念されている。
防除対策	早期発見・早期対応が必要であるため、目撃情報を行政に集め、関係機関が連携して害獣として迅速に駆除する必要がある。
注意する点	野生化した個体はかなり凶暴であること、力が強く手先が器用であるため捕獲用のワナは、しっかりしたロック機構を備えたものを使用する。 (参考) 平成21年度から環境省が東温市において生息状況調査等の事業を実施。

執筆者・写真撮影：宮内康典

種名：ヌートリア

(区分) 特定外来生物

移入した経緯：毛皮獣としての養殖個体を需要低下に伴い放棄

分類： 哺乳類
科名： ネズミ科
学名： *Myocastor coypus* (ミュオカストル・コイプス)
原産地： 南アメリカ

県内での分布状況

生息の確認はされていない



ヌートリアによる水稲被害



(水路近くで被害が集中する)



ヌートリアの足跡(前脚)
(前脚の親指は小さく、通常4本の指跡が残る)



(主に茎の部分が食べられる)

種の特徴	頭胴長50～70cm、尾長35～50cm、体重4～5kg、体色は灰褐色、オレンジ色の門歯と水かきのついた後肢が特徴。
被害状況	県内の生息は無いため被害報告は無いが、定着地ではイネなどの農作物被害及び、淡水産二枚貝の食害によるタナゴなど生態系への影響が懸念されている。
防除対策	岡山県、広島県などに生息しているため、しまなみ海道により島づたいに侵入する可能性がある。また貨物船による侵入も考えられるが、早期発見・早期対応が必要であるため、目撃情報を行政に集め、関係機関が連携して害獣として迅速に駆除する必要がある。
注意する点	

執筆者：宮内康典

写真提供、掲載文参照：鳥取県生産振興課「鳥獣対策虎の巻(鳥取県版鳥獣被害対策マニュアル)」

種名：ヤギ

(区分) 侵略的外来生物

移入した経緯：除草目的での放飼及び不要になった
個体放棄

分類： 哺乳類
科名： ウシ科
学名： Capra hircus (カブラ ヒルクス)
原産地： 国内

県内での分布状況

松山市中島町大館場島



ヤギの食害痕

種の特徴	頭胴長120～150cm、体重30～50kg、雌雄とも角・顎鬚 <small>あごひげ</small> を持つ（無角個体有り）体色はザーネン・シバヤギ系は白、トカラヤギ系は茶～茶褐色及び斑。
被害状況	大館場島では食害により、植物相は壊滅的な被害を受けているのみならず、植物が無くなりむき出しになった表土が海岸に流出し、海岸の環境も破壊されている。
防除対策	不要になったヤギの放棄の禁止。イノシシ対策や除草目的で放飼する場合は計画的に放飼をし、決して放置しないことを徹底指導する。
注意する点	放飼する場合ヤギは樹皮を好食するため樹木の被害が大きい。繁殖期はなく、妊娠期間は150日で1～4仔を産むため放置するとおびただしく繁殖する。放飼する場合オスを去勢することが望ましい。

執筆者・写真撮影：宮内康典

種名：ヒゲガビチョウ

(区分) 侵略的外来生物

移入した経緯：ペットとして輸入された個体の逸出

県内での分布状況

分類： 鳥類 スズメ目
科名： チメドリ
学名： *Garrulax cineraceus* (ガルラックス シネラケウス)
原産地： 東アジア、東南アジア

大洲市、東温市など県内で複数の観察例があり、定着していると思われる。



種の特徴	ツグミよりやや小さい。背や腹はオリーブ褐色で尾羽の先端が白い。
被害状況	日本において具体的な被害は不明であるが、ある景観において最優占種となった場合、群集構造が変化する。ハワイ諸島においてはガビチョウが高密度で生息し、在来鳥類の衰退の一因となっているとされる。
防除対策	過去に輸入され、飼養されている個体の逸出防止。現在、ガビチョウ類の輸入はほとんど行われていない。
注意する点	県内において急速に分布が拡大しているおそがあるため、早急に生息状況を調査し、対応策を検討する必要がある。

執筆者：山本貴仁 写真提供者：瀧野隆志

種名：ソウシチョウ

(区分) 特定外来生物

移入した経緯：ペットとして輸入された個体の逸出

分類： 鳥類 スズメ目
科名： チメドリ
学名： *Leiothrix lutea* (レイオトリクス・ルテア)
原産地： 東アジア、東南アジア

県内での分布状況

石鎚山系に生息。近年観察例が増えており、定着した可能性が高い。



種の特徴	体色は暗緑色で、喉は黄色い。翼に赤と黄の斑紋があり、 ^{くちばし} 嘴は赤い。主に標高1,000m以上の落葉広葉樹林に生息し、大きな声でよくさえずる。
被害状況	県内での被害状況は不明。多くの個体が繁殖することにより、捕食する哺乳類などを誘引し、在来種が捕食されるおそれがある。石鎚山系などのブナ林でソウシチョウが優占すれば、鳥類群集の構造が変化する可能性がある。
防除対策	飼養されている個体の逸出防止。
注意する点	県内において急速に分布が拡大しているおそれがあるため、早急に生息状況を調査し、対応策を検討する必要がある。

執筆者・写真撮影：山本貴仁

種名：ミシシippアカミミガメ

(区分) 侵略的外来生物

移入した経緯：ペット用として移入

分類： 爬虫類

科名： ヌマガメ科

学名： *Trachemys scripta elegans* (トラケミス スプリクタ エレガンス)

原産地： 北・中・南米



ミドリガメ

県内での分布状況

松山市北部を中心とする県下全域
(特に平野部)



(参考写真)
〔在来種〕

イシガメ



クサガメ

種の特徴	背甲は緑褐色で、各甲板には黒帯模様と黄緑模様がある。甲長12～28cm。側頭部には赤い斑紋が入る。 幼体は、いわゆる「ミドリガメ」で知られる。
被害状況	1シーズンに3回～5回産卵し、産卵数も多い。さまざまな止水域に生息し、魚類、両生類、水生昆虫など幅広い食性を持つ。以上のことから在来種であるイシガメやクサガメなどの生活圏および現地の生態系に影響を与えていると考えられる。 現在は、県下の平野部を中心に広く分布・定着しており、池などにおいて日光浴風景を見る限り、在来種よりも優先し、比較的個体数が多いように見受けられる。
防除対策	県下の水域に定着しているが、詳細な分布調査は進んでいない。まず分布の現状を把握したうえで、個体数や繁殖状況を観察し、在来種への影響を調べる必要があると言える。 現実的な駆除方法は、野外での精力的な捕獲、駆除を行うとともに、販売店での注意喚起も必要であると考えられる。
注意する点	現在も飼育個体も少なくないと思われるが、みだりに野外に放してはいけない。

執筆者・写真撮影：岡山健仁

種名： ウシガエル

(区分) 特定外来生物

移入した経緯： 1918年、政府が食肉用として養殖を奨励

県内での分布状況

分類： 両生類

科名： アカガエル科

学名： *Rana catesbeiana* (ラナ・カテスベイアナ)

原産地： 北アメリカ東部

県下全域



(参考写真)



トノサマガエル

種の特徴	成体の体長は11～18cm、幼生の全長は12～15cm。成体の体色は、暗褐色～緑色で、国内のカエル類では最大級。 鳴き声は「ブウオン、ブウオン」と「牛」に似るためその名がついた。 別名：食用ガエル。
被害状況	池や沼などの止水域から緩やかな流れのある河川周辺に至るまで広く生息が認められる。水辺周辺の小動物のほとんどを餌として捕らえるなど、高い捕食性があるため、在来のカエル類をはじめとする野生生物が消失する可能性があり、生態系も乱される原因になっている。
防除対策	効率的な駆除方法は、発見が困難な昼間よりも夜間現地において成体を捕獲する。また、幼生や卵の捕獲、駆除は効果的である。
注意する点	特定外来生物として、飼育・販売・移動・輸入・放逐などは禁止（許可を受けたものを除く）

執筆者・写真撮影者：岡山健仁、画像提供者：環境省中国四国地方環境事務所

種名：ブルーギル

(区分) 特定外来生物

移入した経緯： 本県では1960年代に水産資源として公的に県内へ導入、宇和島市（旧三間町）の野池で試験養殖されていたことが自然水域での拡散のきっかけであるが、その後の県下全域への拡散には放流種苗への混入、密放流など、他の要因による人為移植が関わっていると推定される。

県内での分布状況

県内各地の冷水域・急流部を除く河川の緩流域及び、野池やダム湖に広く定着している。

分類： 淡水魚類
科名： サンフィッシュ科
学名： *Lepomis macrochirus* (レボミス・マクロキルス)
原産地： 北アメリカ



種の特徴	体はやや側偏する。背 ^{せびれ} は二基。口は小さく、目の前縁を超えない。体背部は濃緑色で、体側は緑味がかった銀白色で、7～10本の暗色横帯がある。鰓蓋 ^{えらぶた} の上部に眼径大の暗青色斑がある。成魚では鰓蓋 ^{えらぶた} 下縁から腹部が橙色、下顎腹面が灰青色になる。
被害状況	体サイズが小さくオオクチバスほど被害が注目されないが、雑食性で魚卵や稚魚 ^{ていせいぎよ} 、底棲生物などに広く影響を及ぼす。また、オオクチバスよりも繁殖可能な場所が広く、生息可能な範囲も広いため、被害は広範囲に及ぶ。
防除対策	外来生物法により生息水域からの活きた持ち出しが禁止されているが、すでに県下全域に広がっているため、駆除可能な水域から徐々に生息範囲を減らしていく方策が必要である。
注意する点	冷水域、急流を除く広い範囲に定着可能であり、野池など閉鎖水域でオオクチバスが見られない場合には本種が優占していることがある。

執筆者・写真提供者：清水孝昭

種名：コクチバス

(区分) 特定外来生物

移入した経緯： 国内の自然水域へ公式な手段で移入されたことはなく、現在、日本に生息するものはいわゆる密放流による。本県を含む四国内からこれまでのところ正式な確認記録はない。

県内での分布状況
県内における公式な生息記録はない。

分類： 淡水魚類
科名： サンフィッシュ科
学名： *Microterus dolomieu* (ミクロプテルス・ドロミエウ)
原産地： 北アメリカ



種の特徴	体はやや側偏する。背 ^{せびね} 鱗は二基。体背部は濃緑褐色、体側は黄褐色味がかつた銀白色で、濃色の横帯がある。オオクチバスとは、口の後端が目の位置を越えない点で区別される。
被害状況	肉食性で、魚類、甲殻類、水生昆虫など多岐にわたる生物を補食する上、オオクチバスよりも流れのある場所に進出可能なことからその影響が及ぶ範囲はさらに広い。
防除対策	県内に導入されるとオオクチバスと同様にひろく定着する可能性があり、さらに冷水域、流水域にも影響を及ぼしうるため、自然水域への添加は厳重に防除する必要があるとともに、侵入の有無について十分な監視体制が必要である。
注意する点	外観的特徴がオオクチバスに類似するため、既に県下へ侵入していて気づかれていない可能性がある。体側から撮影された写真であれば識別可能であるため、画像を利用した情報収集も有効である。
備考	ブラックバスは、オオクチバス属に含まれる8種（コクチバス、オオクチバスなど）の総称です。

執筆者：清水孝昭 写真提供者：中井克樹

種名：オオクチバス

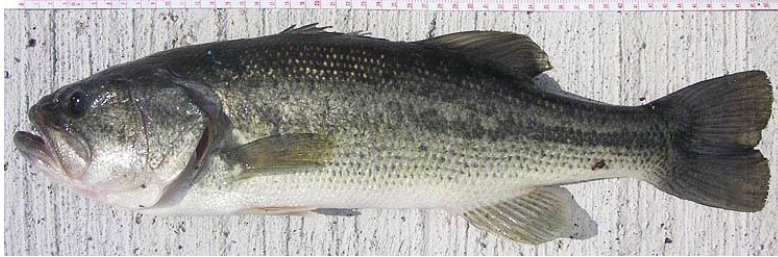
(区分) 特定外来生物

移入した経緯： 本県では1960年代に、水産有用資源との認識のもと、遊漁団体の手で、漁業協同組合の承認下で石手川ダム湖に放流されたのがきっかけ。その後、直ちに面河ダム湖に移植され、その後の移植、拡散は非公式な経緯を経ている。

分類： 淡水魚類
科名： サンフィッシュ科
学名： *Microterus salmoides* (ミクロプテルス・サルモイデス)
原産地： 北アメリカ

県内での分布状況

県内各地の野池、ダム湖を中心に、一部、大河川の緩流域に定着している。



種の特徴	体はやや側偏する。背 ^{せびれ} 鱗は二基。口は大きく、目の後端を超える。体背部は濃緑色、体側は緑味がかかった銀白色で、濃色の横帯がある。
被害状況	肉食性で、魚類、甲殻類、水生昆虫など多岐にわたる生物を補食するため、各地で水産資源や希少生物などに被害を及ぼしている。野池のような狭い空間では特に影響が大きく、生息する魚類が本種のみになってしまう事例がある。県下では天然遡上や放流アユが活発に補食されている事例が確認されている。
防除対策	外来生物法により生息水域からの活きた持ち出しが禁止されているが、すでに県下全域に拡がっているため、駆除可能な水域から徐々に生息範囲を減らしていく方策が必要である。特に野池は本種の大きなストックとなっており、また河川へのオオクチバスの流出が確認されていることから、速やかに駆除を推進することが望ましい。
注意する点	野池で池干しをして本種を駆除する場合、残されたわずかな溜まりで個体が生き残っていることがあるため、完全に干し上げて底土を乾燥させることが重要である。 また、池干しの際に個体が水とともに下流へ排出されると新たな拡散につながるため、水抜き口にネットをかけるなどの対策が必要。

執筆者・写真撮影者：清水孝昭

種名：オオクワガタ東南アジア産亜種

(区分) 侵略的外来生物

移入した経緯：1999年の植物防疫法の改正で多くの外国産クワガタムシが輸入されるようになった。ほどなく全国的にクワガタムシブーム起こり、愛媛県でも外国産オオクワガタが市販されるようになった。

分類：昆虫類

科名：クワガタムシ

学名：Dorcus curvidens sspp.

原産地：東南アジア，中国

県内での分布状況

松山市内で散発的に発見されるだけであり、他地域での発見情報はないが、飼育個体の逸出は各地であると思われる。



種の特徴	体長変異が大きいですが、市販される個体は大形のものが多く、在来種とは体長や大顎の大きさ、形などで識別できるが、累代飼育個体や交雑個体は識別が困難であることが多い。
被害状況	松山市内で散発的に発見されるが、在来種との交雑個体であることがはっきりしているケースは殆どない。ただし、生息しているはずのない場所で非常に小型の個体が採集されたことがあり、この場合は野外での繁殖個体であることが疑われた。
防除対策	特段の防除対策はないが、飼育個体の逸出に留意するよう飼育者に対して啓蒙活動をする必要がある。
注意する点	オオクワガタの発見情報を蓄積し管理する必要がある。

執筆者・写真提供者：酒井雅博

種名：ヒラタクワガタ東南アジア産亜種

(区分) 侵略的外来生物

移入した経緯：1999年に植物防疫法の改正で多くの外国産クワガタムシが輸入されるようになり、ほどなくクワガタムシブームが起こり、愛媛県でも外国産ヒラタクワガタが市販されるようになった。

分類：昆虫類

科名：クワガタムシ

学名：Dorcus titanus sspp.

原産地：東南アジア，中国

県内での分布状況

松山市内で散発的に発見されるだけであり、他地域での発見情報はな
いが、飼育個体の逸出は各地である
と思われる。



種の特徴	体長変異が大きい、市販される個体は大形のものが多い。在来種とは体長や大顎の大きさ、形などで識別できるが、小型個体や雌個体、交雑個体は識別が困難であることが多い。
被害状況	松山市内で散発的に発見されるが、在来種との交雑個体であることがはっきりしているケースは殆どない。ヒラタクワガタはまだ在来個体が各地に広く生息しているので交雑のおこる可能性はオオクワガタよりもずっと高いと思われる。ただし、交雑個体の同定には遺伝子レベルでの解析が必要となるであろう。
防除対策	特段の防除対策はないが、飼育個体の逸出に留意するよう飼育者に対して啓蒙活動をする必要がある。
注意する点	ヒラタクワガタの大形個体の発見情報を蓄積し管理する必要がある。

執筆者・写真提供者：酒井雅博

種名：アルゼンチンアリ

(区分) 特定外来生物

移入した経緯：日本には1993年広島県廿日市市で定着が確認された。愛媛県には未だ未侵入であるがしまなみルートで広島県と直結しているだけに侵入が非常に懸念される。

分類：昆虫類
科名：アリ
学名：Linepithema humile (リネピテマ・フミレ)
原産地：アルゼンチン

県内での分布状況

県内には未侵入と思われる。広島県内ではその後、着実に分布を広げており、山口、愛知、岐阜、神奈川などでも記録された。



撮影：復建調査設計株式会社

種の特徴	小形で黒褐色、在来種のルリアリよりは一回り大形。ハアリによる分散は行われず、分巢によって生息地を広げるため、分散力は弱い。車などの交通機関を介して長距離分散を行う。
被害状況	アルゼンチンアリが侵入すると、他種のアリを駆逐するため侵入地域のアリ相が貧弱になり、多様性が失われていく。また、種子運搬をする在来種のアリが駆逐されると地域の植生にも影響がある。
防除対策	侵入を阻止することが最も大切である。 また、早期発見のため、侵入が予想される場所でのモニタリングも必要であるが、小形で地味な色彩のアリなので、定着後大きなコロニーになるまでは気づかれない可能性が高い。 一般の方への周知活動が効果的と思われる。
注意する点	アリを同定できるスキルを身につける。

執筆者：酒井雅博

種名：オオキンケイギク

(区分) 特定外来生物

移入した経緯： 明治時代中期に観賞用として導入された。その後、法面緑化として広範囲で使用されたものが逸出し野生化した。県内では昭和初期から確認されているが、野生化が問題となったのは1980年代以後であろう。

県内での分布状況
すでに県内各地の河川敷、堤防や道路法面、空き地などに拡大している。

分類： 高等植物
科名： キク科
学名： Coreopsis lanceolata (コレオプシス・ランケオラタ)
原産地： 北アメリカ (ミシガン～フロリダ、ニューメキシコ)



(参考写真) 松山市内での防除



種の特徴	高さ70cm以上になる大型の多年草。5～7月に、直径5～7cmのキバナコスモスに似た花を開花する。虫媒花。
被害状況	強靱な性質のため河川敷、土手、道路法面ではしばしば広大な群落を形成し、本種と生育地を競合する在来種が衰退する一因となっている。
防除対策	結実時期以前（梅雨時期）に刈り払うことが必要。
注意する点	河川敷や土手などで一斉に開花し一面を黄色の花で埋め尽くす風景に地域住民が好感を持っている場合や公園など空き地のグランドカバーとして意図的に播種する場合もあるなど、県民に本種が駆除すべき対象であるとの認識が乏しいことが拡大を阻止できない要因の一つである。

執筆者・写真撮影者：松井宏光

種名：ポタンウキクサ

(区分) 特定外来生物

移入した経緯：日本には1920年代にウォーターレタスの別名で観賞用水草として導入された。水槽に浮かべる観葉植物として人気があり、近年までペットショップやホームセンターなどで苗が販売されていた。苗が水路や溜め池に逸出あるいは投棄され、関西地方以西では1920年頃から野生化した。県内では1955年に西条市で初めて野生化が確認された。

県内での分布状況
すでに県内各地の河川、溜め池に拡大している。

分類： 高等植物
科名： サトイモ科
学名： *Pistia stratiotes* (ピスティア・ストラティオテス)
原産地： アフリカ



種の特徴	水面を浮遊する常緑の多年草。暖地系の植物であり冬期の水温が15 以下では枯死するとされるが、それ以下でも水温で12 程度なら生育を続けるとの報告もある。県内では湧水泉など冬期の水温が比較的高い水域で越冬している。根茎や越冬芽による栄養繁殖が盛んで短期間に爆発的に増殖する。
被害状況	水面を覆うように繁茂するので、水中に光が届かず、在来の沈水性水草が衰弱する。また植物プランクトンの生育も抑えられるので溶存酸素が減少し、魚へ悪影響が出るおそれもある。さらに流出水路や水取入れ口に詰まって流れを阻害する。
防除対策	水面に浮遊する植物体を機械的に取り除く。
注意する点	河川や溜め池など広い水面では水面を寡占した場合は、除去に相当の労力が必要となる。また植物体が大量であれば処分も難しくなる。発生を確認したら早い時期に除去することが望ましい。

執筆者・写真撮影者：松井宏光

種名：オオフサモ

(区分) 特定外来生物

移入した経緯： 別名パイロットフェザーといい、大正時代に観賞用水草として持ち込まれた。県内では1960年代から各地で確認されている。

県内での分布状況
すでに県内全域の水路、溜め池に拡大している。

分類： 高等植物
科名： アリノトウグサ科
学名： *Myriophyllum apuaticum* (ミユリオフフルム・アクアティクム)
原産地： 南アメリカ



種の特徴	暖地性の水草で水底に根を伸ばし、やや赤みを帯びた茎を水中に長く伸ばして上部は水面から立ち上がる。葉は羽状に分裂し5～6枚が輪生する。水中葉は水上葉は小さくて緑白色。雌雄異株で、日本で生育するものは雌株のみであり種子は出来ない。地下茎や切れ藻から栄養繁殖し、時には水域を寡占する。寒さには比較的強く暖地や湧水池では水中部も枯れずに越冬する。
被害状況	水中に繁茂することで、在来水草と競合する。
防除対策	植物体を機械的に取り除く。
注意する点	一端、繁茂すると完全に除去することは困難となる。

執筆者・写真撮影者：松井宏光